

平成22年度  
研究調査報告  
【概要版】

**第385集 岩田章子**

**小学校国語科における書く力の育成に関する研究**

～「書く力の育成プログラム」とループリックの活用を通して～

**第386集 田中宏直**

**小学校算数科(「量と測定」の領域)におけるICTを活用した指導に関する研究**

～基礎的・基本的な知識・技能の習得を中心に～

**第387集 長谷由香 市森幸子 加藤眞智子**

**四日市市の不登校児童生徒に効果的な支援方法に関する研究**

～不登校児童生徒の3年間を通じた縦断的分析から～

## 【研究報告 第385集】 概要版

### 小学校国語科における書く力の育成に関する研究

#### - 「書く力の育成プログラム」とルーブリックの活用を通して -

四日市市教育委員会教育支援課 研修・研究グループ 研修員 岩田 章子

## 1 研究の目的

小学校国語科において児童の実態に合わせた「書く力の育成プログラム」とルーブリックによる評価を活用することで、説明的な文章を書く力が育成できることを明らかにする。

## 2 研究の内容及方法

### (1) 「書く力の育成プログラム」の作成と実施

「書く力の育成プログラム1 朝学習で学ぶ」では短時間（10分間）で集中して活動に取り組む。楽しみながら書くことに慣れる学習活動から始め、段階的かつ継続的に説明的な文章を書く練習を行う。

「書く力の育成プログラム2 授業で学ぶ」では、国語科の授業の中で、文の構成や書き方について教材を通して学ぶ。その後プログラム1で学んだことを踏まえて、自分で説明的な文章を書く。

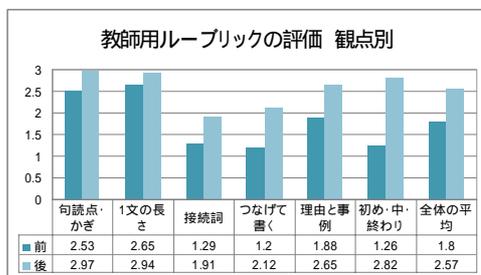
### (2) ルーブリックの作成と活用

児童の書いた文章を評価するための手だてとして以下の2つのルーブリックを作成・活用する。

教師用ルーブリックでは、児童の書いた文章を観点別（表記、語句・文、構成・段落）に評価する。児童用ルーブリックは、学習の振り返りカードとして活用し、主に児童の関心・意欲を評価する。

## 3 研究のまとめ

### (1) 実践前後の書く力の変容



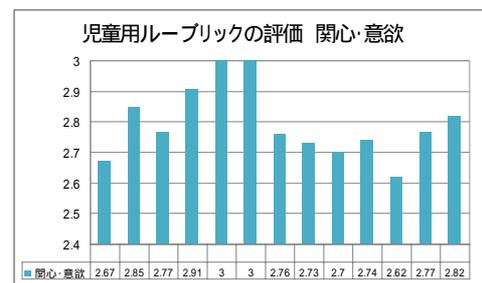
【教師用ルーブリックの評価 観点別】

「書く力の育成プログラム」の前後で書いたそれぞれの文章を、教師用ルーブリックを用い評価した。

「書く力の育成プログラム」を実施したことにより、児童の書く量が増え、文のまとまりや構成を意識して書けるようになった。

また、理由や事例をあげ、具体的でわかりやすい文章を書けるようになっていった。このことから、児童の書く力が育成されたことが明らかになった。

### (2) 関心・意欲の変容



【児童用ルーブリックの評価 関心・意欲】

「書く力の育成プログラム1」で、書くことを楽しむ活動から始めたことにより、書くことへの関心・意欲が高まった。説明的な文章を書く練習においても、段階的かつ具体的に指導したことで、書き方がわかり、関心・意欲を持続することができた。

### (3) 「書く力の育成プログラム」の効果的な活用

- ・ 知的好奇心を起こさせるような活動を最初に設定し、書くことは楽しいと感じさせるようにする。
- ・ 説明的な文章の書き方を具体的に教え、書くことを習慣化させる。その際に児童の負担にならないため、短時間で集中して行える題材にする。

### (4) ルーブリックの効果的な活用

- ・ ルーブリックを事前に作成するために教材研究や児童の実態把握をきめ細かく行う。
- ・ 到達目標は児童の能力より少し高いところを設定し、達成する喜びを感じさせるようにする。
- ・ 「書く力の育成プログラム」の各実践後に振り返りカードや教師用ルーブリックで児童の関心・意欲や到達度を観点別評価することで、教師自身が指導を振り返り、次回に生かすようにする。

【研究報告 第386集】 概要版

小学校算数科（「量と測定」の領域）における ICT を活用した指導に関する研究  
 - 基礎的・基本的な知識・技能の習得を中心に -

四日市市教育委員会教育支援課 研修・研究グループ 長期研修員 田中 宏直

1 研究の目的

小学校算数科（「量と測定」の領域）において、効果的に ICT を活用した指導を行うことで、基礎的・基本的な知識・技能が習得できることを明らかにする。

2 研究の内容と方法

(1) 「量と測定」の領域における ICT 活用

6年生の算数科の単元「立体のかさの表し方を考えよう(体積)」で、算数科の習熟度が下位の子どもを対象に、基礎的・基本的な知識・技能の習得をめざした ICT を活用した授業を行い、効果の分析を行う。

(2) ICT を活用した授業デザイン

単元「立体のかさの表し方を考えよう(体積)」の特性をふまえた ICT の活用意図を次の3点として検証授業を行った。

情報の共有

教科書を電子黒板に映し出したり、具体物の操作の演示で実物投影機を活用したりして、指示等の音声言語を視覚化する。

イメージの拡充

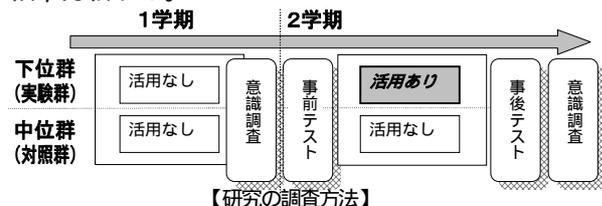
立体の体積の概念や立体の求積公式の意味を捉えさせる手だてとして、具体物の操作の後、パワーポイント教材でシミュレーションを行い、理解を促す。

知識・理解の定着

学習内容の習熟を図るため、パワーポイント教材を活用して、授業のはじめに前時までの復習を行う。

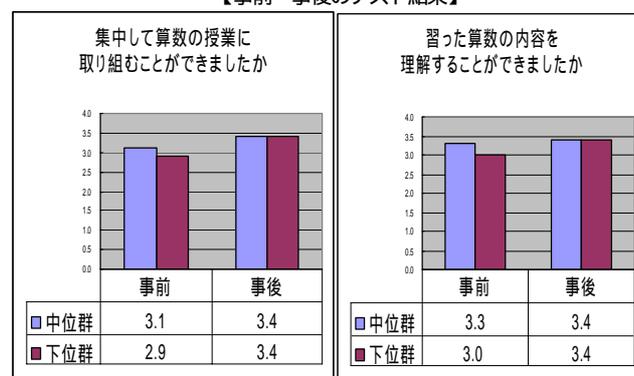
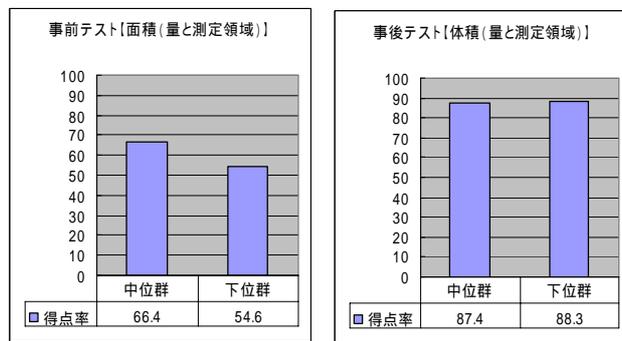
(3) 効果の測定

検証授業前後で「量と測定」の領域のテストを実施し、(事前「面積」、事後「体積」)下位群 (ICT 活用あり) と中位群 (ICT 活用なし) で比較、分析する。



3 研究のまとめ

(1) 事前・事後のテスト、および意識調査の結果より



【意識調査「集中度」の変容】 【意識調査「理解度」の変容】

ICT を活用した指導を行ったことにより、事前テストで見られた中位群と下位群の差はなくなり、ほぼ同じ得点率を示した。また、意識調査では、「集中度」「理解度」が下位群で上昇し、中位群と同様の数値を示した。これらの結果から、ICT を活用した指導を行うことは、基礎的・基本的な知識・技能の習得に効果的にはたらくことが明らかになった。

(2) ICT の効果的な活用について

・「情報の共有」の観点から

ICT を活用して子どもに必要な情報を可視化し、学習を効率的に展開できるようにする。そのことが、学習内容を習熟する時間を確保することにつながる。

・「イメージの拡充」の観点から

単元、教材の特性を吟味し、具体物の操作と ICT を活用したシミュレーション等を組み合わせて指導を行う。これらにより、体験と思考を即時的につなぎ、学習内容の理解を深めることができる。

・「知識・理解の定着」の観点から

授業の導入に、子どもの実態をふまえて短時間で繰り返し ICT を活用することで、つまづきを取り除いたり、学習の学び直しを効果的に行ったりすることができる。

## 1 研究の目的

四日市市の不登校児童生徒の実態を分析し、傾向や課題を明らかにするとともに、その結果を踏まえ、不登校児童生徒に対する四日市市の支援方法を提案する。

## 2 研究の内容と方法

### (1) 不登校の定義

「何らかの心理的状態、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席したもののうち、病気や経済的理由による者を除いたもの」とする。

### (2) 調査対象

平成19年度の中学校1年生の不登校生徒について3年間を通して分析する。転出入等状況が正確に把握できなかった生徒を除き、3年間で30日以上欠席した生徒160名を対象とした。

### (3) データの収集

生徒指導報告書

四日市市教育委員会指導課より提供を受けた。

不登校状況にかかる関係資料

四日市市教育委員会指導課より提供を受けた。

聞き取り調査

<時期> 平成22年7月～9月

<内容と方法> 不登校の時期、日数、発生機序、きっかけ、継続理由、学校の支援、進路の各分析項目について、生徒指導報告書から正確に判断できない項目、学校で実際に行った支援内容とその効果について、適応指導教室指導員が学校訪問をし、担当者や管理職に面談し、聞き取り調査を行った。

### (4) データの分析

四日市市の不登校生徒の実態

「不登校となった時期」「欠席日数」「発生機序」「不登校となった直後のきっかけ」「不登校状態が継続している理由」「学校で行ってきた支援」「進路」の7項目について分析し、実態を捉える。

学校における支援の成功事例

聞き取り調査の結果を中心に、学校で行

った支援についての成功事例を「心理的支援」「教育的支援」「福祉的支援」「関係機関との連携」の4つの観点から分析する。

## 3 研究のまとめ

### (1) 四日市市の不登校児童生徒の実態から

中学校1年生時に初めて不登校を経験する生徒が多い。学校内において、教職員は教育的な支援を中心に様々な支援を継続的に行っている。一方で、これらの支援が不登校児童生徒に対して効果があったという教職員の認識が低いなどの状況から、今後、以下のような支援を行うことが効果的であると考える。

小中学校の連携

アセスメントの充実

校内の支援体制づくり

早期対応早期介入

### (2) 学校における支援の成功事例から

心理的支援・・・関係者（家族・教職員・生徒等）が早期から支援の方法や、各役割について共通認識を持ち、一貫した支援を行ったことで効果が顕著に現れた。専門家の助言を得ながら、早期に適切なアセスメントを行い、具体的な支援方法や役割分担を明確にすることが重要である。

教育的支援・・・校内の支援体制や事例検討会が校内体制として位置づいており、全教職員が支援方針を共通理解した上で支援が行われたことが良好な結果となった。

福祉的支援・・・家庭内や、学校内での居場所の確保、ルールや具体的な行動の明確化と本人や保護者に対するプラスの評価といった支援を行った。その結果、子ども自身が顕著に成長し課題を克服できた。

専門機関との連携・・・小学校からの情報も含め、各専門機関との情報共有、早期の連携、綿密な情報交換が効果的であった。

### (3) 具体的な支援方法

組織的な校内支援体制のもと、不登校児童生徒の課題を教職員らでチェックできる各シートや電話対応マニュアル、校内支援会議を効率的に実施するためのシート等を活用することによって、不登校児童生徒の減少が期待できる。シートの活用の仕方、方法等については今後の研究で明らかにしたい。

各研究の詳しい内容は、四日市市立教育センター教育情報データベース（市立小・中学校・幼稚園のみ閲覧可）をご覧ください。

（URL <http://yec.db.city.yokkaichi.mie.jp/>）

**教育情報データベース**  
四日市市教育委員会



The screenshot shows the homepage of the Yokkaichi Education Information Database. It features a search bar at the top right, a navigation menu with options like 'ホーム' (Home), '検索' (Search), and 'ログイン' (Login), and a main content area with a table of links to various educational resources.

| メニュー              | キーワード   |
|-------------------|---------|
| つくしネット            | 1. 研究情報 |
| お知らせ・教育センターニュース   | 2. 教育情報 |
| 研究・研修・教材・展覧会・イベント | 3. 図書情報 |